

ドイツ紀行



聖マリアンナ医科大学東横病院 外科部長

田中 一郎

序章 今回の旅行の背景について

平成12年9月に、17th World Congress of the International Society for Digestive Surgeryがドイツのハンブルグで開催された。われわれ3人は演題が採用されたのを口実に、夏休みを兼ねてドイツ縦断の旅を計画した。小生と、部下である頑固だが人の良い助サン（田中圭一氏）、英会話の得意な角サン（林淳也氏）が同行した、中年男性3人の学会兼バケーションの始まりである。助サン、角サンは2人とも恐妻家であるため、奥さんの了解を得るのが大変だったことは、容易に想像できる。中年男性が何日も時間を共有することは学会の時くらいなので、できるだけ気を使わない人物との同行が条件であった。

第1章 はやる心を抑えて
(出発からドイツ到着まで)

出発当日、成田空港には遅刻常習者の助サンが、前日より徹夜して出発4時間前から待っていた。小生と角サンは出発2時間前に到着した。田舎育ちの助サンは、相変わらず大荷物である。

長旅であったため（もちろんエコノミークラス）少々疲れたが、ベルリンに無事到着した。フライト中は、狭い座席であったにもかかわらず助サン、角サンは熟睡していたが、小生は安眠できず、時間もあったのでドイツのイメージを思い浮かべていた。食べ物ではビール・ワイン・ソーセージ、自動車ではベンツ・BMW・アウディ、観光ではライン川・ロマンチック街道・ノイシュヴァンシュタイン城、歴史的な事柄では神聖ローマ帝国・

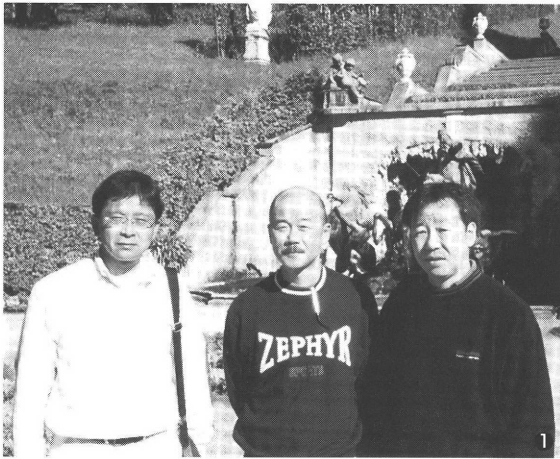
ナチスドイツ・ベルリンの壁などであろうか。また、卑しいせいか出てきた食事はおいしい・まずいにかかわらず全部平らげる。だから旅行するといつも太るのだ。

第2章 ベルリンで

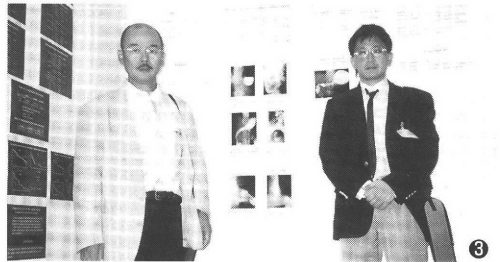
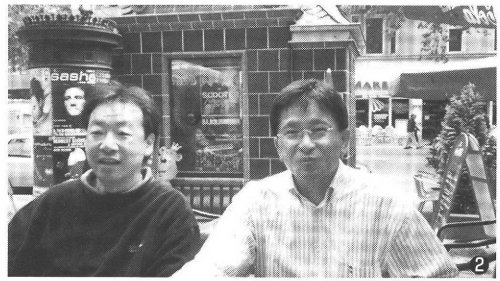
まず、ドイツについて印象深かったのは、ゲルマン民族は想像していたよりも身長が高くない。小生は168cmであるが、町を歩いていても威圧感ではなかった。そして、治安がすこぶる良いことである。夜半に若い女性が繁華街を一人歩きしていても、日本と同じくらい安全のように見受けられる。

われわれの宿はカイザー・ヴィルヘルム記念教会の近くで、Zooというターミナル駅まではすぐである。ここからブランデンブルグ門まで市内バスで行き、後はひたすら歩く。助サンはすぐに疲れるようであったが試練と言いついて、今回の旅行はできるだけ歩くこと、地元の交通機関を利用することとした。

ブランデンブルグ門より東は旧東ベルリンであり、ここよりアレキサンダー広場まで歩く。旧東ベルリンの町並みは、スパイ小説の読みすぎかもしれないが、未だに何か冷たさを感じるし東欧の面影が残る。マリエン教会・ベルリン大聖堂に歴史を感じながらフンボルト大学に入り、マルクスやアインシュタインにあやかろうとするが記念撮影だけとした。それにしても、助サンはすぐに腹が減る。彼は食事時には「ズッペズッペ」と言いながら必ずスープを注文する、B級グルメの典型



- ① 左から角サン、筆者、助サン
 ② ベルリンでの昼食
 ③ 会場で（ポスタープレゼンテーション）



的な男である。

ポツダム広場近くガラス張りの建物、新ナショナルギャラリーでピカソ・モネ・ルノワールなどを鑑賞するが、短時間のため早歩きで駆けめぐ。1989年、東西冷戦の象徴であったベルリンの壁が、歓喜のうちに打ち壊されるところをテレビに釘付けになって見ていたことは記憶に新しい。高さ4m、全長155kmに及ぶ壁は、そのほとんどが取り壊され、現在800m程度の長さしかなく、当時の様子は壁に貼り付けてある写真でしか見ることができない。

第3章 ドキドキの学会ハンブルグ

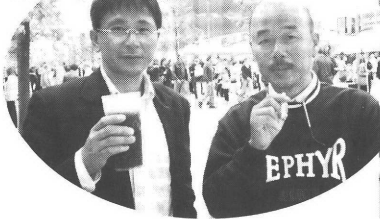
ドイツ第2の大都市であるハンブルグは、ドイツを縦断するエルベ川が北海に流れ込む手前、入り江のように幅広い大河になって河川港を作りだしている。波止場町だけあって、いかれたお兄さんがたむろしている駅周辺はチョット怖い。ヨーロッパでも1、2の荷揚げ量を誇る港町なので、魚貝類はおいしいといわれている。われわれは早速、『地球の歩き方』という旅行雑誌を参考にレストランに入り、魚貝類を食べるとなかなか美味であった。

翌日、会場にいくと角サンの調子が悪い。前

日の魚貝類があたったらしい。幸いポスターセッションで、オーラルプレゼンテーションがなかったために助かった。多分、学会のストレスも魚貝類に上乘せされていたのに違いない。なんとか発表が終わった後、小生と助サンは聖ミヒヤエル教会の展望台で街並みを見学してから、アルスター湖の遊覧船に乗る。中年男性同士の旅も気軽でいいもんだ。

夕食は角サンに気を使って中華料理店で中華粥を食べたあと、学会発表から解放された勢いもあって、レーパーバーンに繰り出す。知人に教えられたヨーロッパ有数の〈夜の遊び場〉だけあって、メインストリートは1マイルすべてバー、キャバレー、ストリップ劇場が軒を連ねており、裏通りには飾り窓の女たちがいるらしい。ストリップ兼キャバレーのような店がほとんどだったので、3人で協議のうえ一番清潔で安心できそうな店を選んで入店すると、ホステスがたちまちわれわれの席に付く。舞台では金髪女性のストリップだ。ホステスがシャンパンボトルの追加注文をオーダーするところで、角サンがおかしいことに気付く。酒豪の角サンにしてみれば、短時間にシャンパンボトル一本が飲めるわけがないと思ったのである。「中味は絶対炭酸飲料ですよ」という言葉にチェッ

4



- 4 万国博覧会で助サンを待つ
 5 ローデンベルグ
 この後バスに遅れそうになる
 6 ディンケルスビュール
 助サンは疲れ切っている



5



6

クすると、確かに数万円ぼられていた。いい気になってストリップを鑑賞していた小生と助サンはまったく気付かなかったが、地元男性の席にはホステスが付いていない。角サンは体調不良にもかかわらず嗅角が優れているのだろう。それにしても旅先で邪まな気持ちを持ってはいけない。われわれの宿はハンブルグより1つ南のハンマーブロックという駅であったが、小雨降る夜道を中年男性がショボショボ駅から帰路につく姿は様にならない。

第4章 学会場を離れハノーファー經由 古都ヴィルツブルグへ

ICE (inter city express) に乗り、角サン希望の万国博覧会を見るためにハノーファーへ到着する。角サンがバスの運転手に行き先を英語で話し掛けるが、一般のドイツ人には英語が通じない。小生は、ドイツ国民に親近感を覚えると共に安心する。

万国博覧会の敷地は広いので、移動するだけでも大変だ。体力がない助サンはムクの〈叫び〉のような顔をして、いつも500mくらい遅れてついて来るが大丈夫であろうか心配になる。

第5章 ロマンチック街道で

食事はヴィルツブルグでの夕食が一番印象に残る。フランケンワインにフランケン料理は、この地方の名産品だ。ワインはフルーティであり、肉・

ソーセージ・イモ類は何ともこくがある。フランケンという名称はフランケンシュタインに関係があるのかと小生は考えたのだが、どうもこの地方のことであるらしい。

翌朝10時に出発ということもあって、早朝起床して散歩に出る。この都市は8世紀には交通の要衝として発展し、神聖ローマ帝国時代には帝国会議が開かれていたところだ。また、16世紀の農民戦争の中心となった一帯である。マイン川沿いに建てられたマリエンベルグ要塞を見上げると歴史を感じ、マイン橋に立つとロマンチックな気持ちになるのが不思議だ。朝食でレストランに行くと、小生と同年齢くらいの日本人中年男性が、不倫であろうか20代の綺麗な女性と目の前で食事しているのを角サンが指摘する。角サンはこういうことには目聡い。

もう二度と訪れることはないであろうこの古都にもう少し滞在したかったが、すぐに出発の時間になってしまった。ここからはヨーロッパバスでの旅だ。中世の小都市を回りながら、ロマンチック街道のハイライトとしてドイツ観光の目玉となっているローテンベルグというおとぎの町につく。ローテンベルグは町全体が中世をそのまま凍結している。町が城壁で囲まれていて、散歩すると時間の迷路の中にいるようだ。助サンは食い意地が張っていて、到着後すぐに名物の菓子シュネーバル(スノーボール)を買う。ひも状の生地をぐるぐる巻いて油で揚げたドーナツだ。直径10cm

⑦ ノイシュヴァンシュタイン城の麓
ここから歩く

くらいあって、口の周りに粉砂糖を付けながらむしゃぶりついている助サンもさすがに食べ切れな
い。角サンは美術館より博物館のほうが好きなの
で、誘われるままに中世犯罪博物館に入ってみる。
刑罰には恥辱の仮面の種類が多い。この仮面を付
けさせられて町中で晒し者にされることが多かつ
たようだ。

のんびり見学していたせいもあって、時間ぎり
ぎりになってしまう。バスの時間に遅れてしまい
そうになったにもかかわらず迷子になってしまっ
た。助サンは遅刻常習者であるが、この時ばかり
は地図を片手に大奮闘である。何とか走って出発
時刻に間に合った。ディンケルスビュールという
町は三十年戦争によって何回もカトリックからブ
プロテスタントと宗派が変わったことで知られる。
われわれは、ここで初めて屋台のドイツソーセ
ージを食べる。助サンは一皿では足りないらしく追
加する。

それにしても緯度が下がったためか結構暑い。
街は数百年長持ちするという木組の美しい家があ
り、窓辺には花飾りが似合う。ドイツの主婦は家
の中を完璧に整頓する。ほとんど強迫観念に取り
付かれているかのごとく、整理整頓に力を注ぐこ
とが誇りである。その誇りを外に向かって宣言す
るのが道に面した窓辺なのだ。ドイツ人のワイフ
を貰えば毎日が快適であろうことは、容易に想像
できる。私が訪れた国の中では、規律正しいドイ
ツが一番肌に合うように思える。

第6章 ビールの町ミュンヘンから ノイシュヴァンシュタイン城へ

限られた時間での旅行は忙しい。ミュンヘンで
夕食に外出すると、街中は自転車とインラインス
ケートに乗っている学生でいっぱいだ。東京やニ
ューヨークで見られるようないかれたお兄さんは
見かけない。店頭にはアイスバインというブタの
大腿肉の塩漬けをまるまるゆでたものが並んでい



るが、食欲旺盛な助サンにも量が多いと見受けら
れる。白ソーセージを注文するが、名物だけあっ
て遅い夕食ともなると売切れた。それでもバイエ
ルン料理はボリュームがたっぷりある。

翌日早朝よりノイシュヴァンシュタイン城観光
だ。バスで南へ行くに従い、バイエルン・アルプ
スの山並みが見えてくる。同じバス観光に同席し
た、スペイン語を話す中年女性5人組がうるさく
てしょうがない。どこの国でも女を捨てた中年女
性は勝手気ままだ。喧騒の車中、山の好きな角サ
ンが感動しているが助サンは寝ている。私はこの
中年女性に腹を立てながらも黙っている。

バイエルン国王ルートヴィヒ2世が隠れ家的に
使用していたリンダーホーフ宮に着く。こじんま
りしているが、ルートヴィヒ2世が長期滞在した
ところで、目を見張るほど絢爛豪華である。ディ
ズニーの宣伝にも使われている本日のハイライト
であるノイシュヴァンシュタイン城の麓に到着だ。
レストラン選びもうるさい助サンに誘導されて屋
外で昼食を食べるが、どこでも観光地の食事はま
ずい。馬車に乗れば15分程度で麓よりノイシュヴ
ァンシュタイン城まで行ける。助サンは盛んに馬
車に乗りたがるが、この意見を却下し歩いて行く
こととする。山道は馬の糞で臭い。作曲家ワグナ
ーのパトロンとして、異常なまでにオペラに取り
憑かれたルートヴィヒ2世が建設したユニークな
城である。妃をめとらず、孤独で数奇な狂気に満
ちたルートヴィヒ2世の運命は近くの湖での謎の



⑧ ライン川
ローレライを知らない角サンと一緒に

死に至るまで、今もって多くの人の関心を集め映画や多数の書物に語り継がれている。

第7章 旅の終わり —フランクフルトとライン川

フランクフルトは今までの町とは違い、ドイツの金融・商業の中心地であり高層ビルが立ち並ぶ。ドイツは日本と同じ敗戦国でありながら、奇跡ともいわれる戦後復興を成し遂げた。ドイツは日本と同じく資源大国ではない。ゲルマン民族は日本人と同じく勤勉であり、かつ規律正しいという国民性も経済の奇跡的な復興に果たした役割は大きかったに違いない。日本が低価格製品で国際競争に打ち勝ったのに対し、ドイツは製品に高度な付加価値を付けることによって勝負したのだ。ゲルマン民族の技術水準の高さはあらゆる分野で卓越しており、確かにドイツ製品の値段は高いが、頑丈で長持ちし信頼性が高い。

小生は、ここで初めて助サン角サンに約1時間の買い物の時間を与えた。そうしたら2人とも解き放たれた獣のようになり、血眼になって高級ブランドストリートであるゲーテ通りを走る。よほど奥さんを愛しているのだろう、角サンは、エルメス店に入店するや10分もしないのに10万円もするバッグを買ってしまうありさまである。文豪ゲーテもさぞかしビックリしたであろう。

ライン川下り観光のバスが予定時刻に来なかった。われわれは途方に暮れて、ホテルに座っていた日航の現地デスクの若いかわいらしい女性に観光会社に連絡をしてもらったら、どうも忘れていたらしくベンツで迎えに来た。非があるにもかか

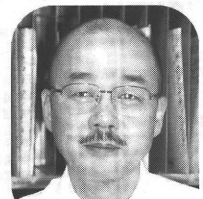
わらず決して謝らない。留学経験のある角サンが言うには、外人は決して謝らないというのだ。何とか途中から観光バスの一行に合流できた。最後の観光はライン川下りだ。ドナウ川が母であれば、ライン川は父なる川といわれているドイツ経済の大動脈であった。古城を見ながら風に吹かれての川下りは楽しい。仕事を忘れ雑念を忘れ、水の精ローレライに水底に引き込まれるのを忘れてのんびりとした時間を過ごす。

第8章 終章

ブランド好きの助サン角サンは、フランクフルト空港でのショッピングに期待をかけていた。ところがチェックインを済ませると、空港の中に免税店があまりに少ない。慌てた助サン角サンは、ダッシュでチェックインカウンターを出て行ってしまった。空港ターミナルビルにお土産店があると思ったのだろう。後で聞いてみると、2人で空港ターミナルビルを走り回ったらしい。このようにして中年3人の珍道中は終焉を迎えるのである。こんな夢ならまた見てみたい。

筆者近況

平成14年1月31日に聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院勤務を終了し、平成14年2月1日より聖マリアンナ医科大学東横病院勤務となりました。



最近は両親の調子も悪いため、好きなゴルフ・スキーはあまりやっておりません。スキーは、志賀高原で検定2級に落ちて以来、イメージトレーニングは欠かさずしております。勤務先も変わったこともあり、これからは地域医療に貢献していきたい所存であります。